

へるす・りさーち No.56

名古屋市衛生研究所

ひやくにちせき

百日咳ってどんな病気？

～長くしつこい咳が出る人が増えています～

百日咳は、乳児において重症化しやすく、激しい咳が特徴的な症状です。子どもが感染しやすいですが、大人でも普通のかぜ症状と比べて長くしつこい咳の症状が出る場合があります。新型コロナウイルス感染症が流行していた時期には百日咳の患者数は減少していましたが、2025年になってから再び増加し、4月以降流行しています。今回は、この「百日咳」についてご紹介します。

【百日咳とは？】

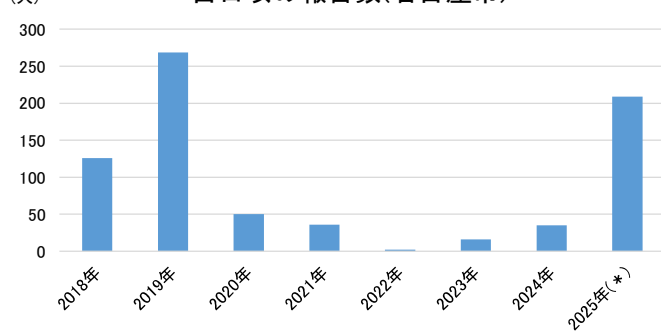
百日咳は、百日咳菌(ボルデテラ・パーツシス)による細菌感染症で、この百日咳菌に感染すると、特有のけいれん性の激しい咳が起こります。百日咳菌は麻しんを引き起こす麻しんウイルスと同様に強い感染力を持っています。母親からの免疫の移行があまりなく、世界的にみると6か月未満の乳児の死亡率が高くなっています。パラ百日咳菌という菌も百日咳のような症状を起こすことがあります。百日咳という名前は、咳が数日から数週間長く続くことからついたと考えられています。百日咳菌の出す百日咳毒素は、のど・気道に炎症を起こし、特徴的な咳を引き起こすと考えられています。

百日咳菌

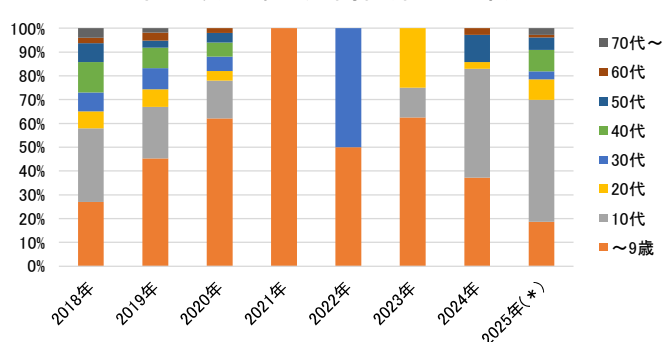


出典: 米国疾病予防管理センター公衆衛生画像ライブラリ <https://phil.cdc.gov/Details.aspx?pid=22874>

百日咳の報告数(名古屋市)



百日咳の年代別割合(名古屋市)



* 2025年は6月14日(診断日)まで

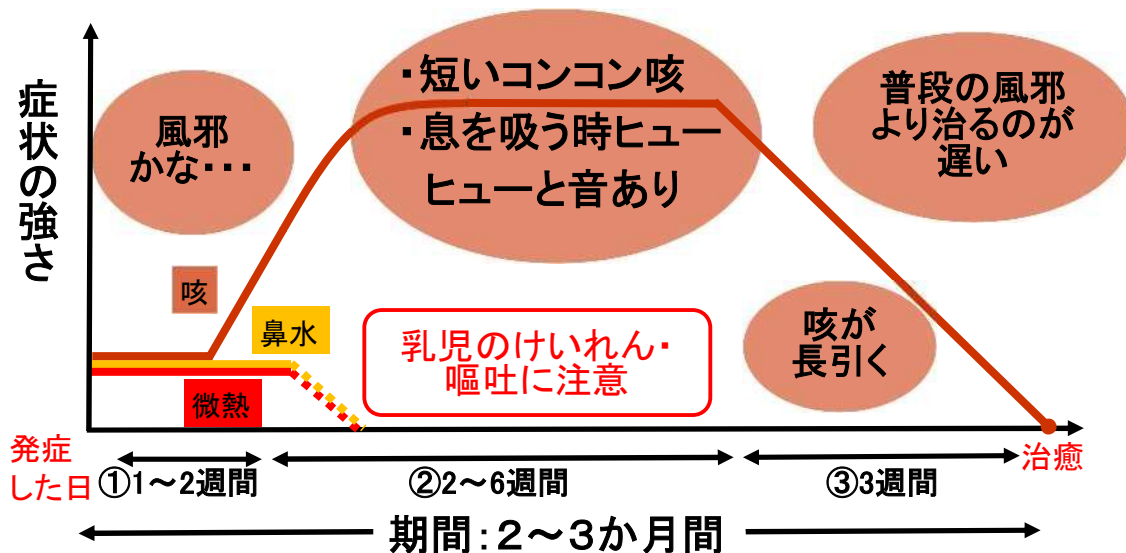
WHO(世界保健機関)の発表によると、世界的にみても百日咳の流行は子どもが中心であり、世界各国で、いまだに感染拡大が生じています。日本でも、1950年に百日咳ワクチン接種が開始される前は年間5万から10万人以上の報告があり、ワクチンの普及により患者数が減少しました。

名古屋市においてもワクチンにより患者数は減少しましたが、近年では2019年に269人の百日咳の報告がみられました。新型コロナウイルス感染症の世界的流行と飛沫・接触感染対策等の影響もあり、2022年には2人の患者が発生したのみでした。その後2023年も新型コロナ流行前と比べて患者数の減少がみられました。2025年に患者数が増加し、2025年は6月14日までで、すでに209人が百日咳と診断されています。年代別割合においては、10代以下の割合が多く、2025年も約7割が10代以下の子どもです。60歳以上の高齢者の割合は多い年でも約6%であり、比較的若い年代での流行がみられていることが分かります。乳児の患者は周囲の大人や年長のきょうだいから百日咳菌に感染すると言われています。

【感染経路・予防】

百日咳菌に感染すると、のどや鼻・気道で百日咳菌が増殖します。患者が咳をした際に排出された百日咳菌を含む飛沫や、患者の触れたもの・分泌物を触ることで飛沫感染・接触感染します。予防策として、**予防接種が有効**です。子どもの場合、**4種混合ワクチン(DPT-IPV)**もしくは2024年から開始された**5種混合ワクチン(DPT-IPV-Hib)**の定期接種が有効です。予防接種スケジュールに合わせて接種しましょう。効果は約10年間持続し、感染を約85%抑制すると考えられています。大人の場合、ワクチンの追加接種も有効です。人が集まる場所・機会において、**マスク・手洗いなどの対策**が必要です。知らないうちに百日咳菌感染がまん延している可能性もあり、特に重症になりやすい生後6か月未満の乳児などは、**体調不良時に外出を控える**など注意しましょう。

【症状】



百日咳の症状は3つの時期に分かれます。①**カタル期(1～2週間)**は、通常7～10日の潜伏期間を経て発症し、通常の風邪のような症状が1～2週間続きます。百日咳では、風邪のような症状は治まらず、次第に咳がしつこくな^{けいがいき}ってきます。②**痙咳期(2～6週間)**は、短い「コンコン」という連続した咳発作がみられるほか、息を吸い込むときに「ヒューヒュー」という笛が鳴るような音がします。これは2～6週間続き、大人では咳の症状が激しいだけであることに^{けいがいき}対し、乳児の場合は肺炎、脳症、けいれん等が生じ重症化する可能性があります。③**回復期(3週間)**は、咳が収まり回復に向かいますが、回復期だけでも3週間以上かかることに加え、全体の期間が長く、大人では百日咳だと分からず病院に行ってみるともう回復期だったということもあります。乳児では、症状が分かりにくいこともあり、様子がおかしいと思ったら迷わずにかかりつけ医を受診しましょう。

【治療】

百日咳の治療には抗菌薬を内服します。生後6か月以上の患者の場合は**マクロライド系抗生物質(エリスロマイシン、クラリスロマイシン)**を使用しますが、これらは百日咳の初期症状である**カタル期**によく効くと考えられており、早期受診・治療開始が重要だと言えます。生後6か月未満の乳児においては、**副作用を考慮してアジスロマイシン**という大人とは別のマクロライド系抗生物質を内服します。軽症でも周囲の人にうつす可能性もあるため、早めに治療を開始しましょう。また、近年ではマクロライド耐性菌が増加しているため、注意しましょう。

